

静岡県葵区井川における伝統智

川上香（植物と人々の博物館研究員）

Yさんの日本ミツバチの飼育

～ 静岡県葵区井川上坂本

1. 井川の概要

井川は静岡県の最北端に位置している。井川村は、田代・上坂本など6か村が合併し1889（明治22）年に成立した。その後、1968年まで存続したが、静岡市に合併し、現在は静岡市葵区の一地区となった。東西を赤石山脈に囲まれ、大井川が蛇行して流れ、その両側標高約600から700メートルに集落が点在している。秋からは冷涼な気候となり、冬の降雪は多い。

井川にも水田はなく、焼畑で雑穀を栽培し、江戸時代には山林の伐採や杓子、めんばなどの木地物、樽木などを出して交易を行っていた。近代からの井川は、大規模なダム計画、その完成により生活が一変した。1957年に大井川を堰きとめた人造湖井川湖が、1961年には大井川上流に畑薙ダムが完成した。井川湖ができる際、村

の約3分の1の家が水没、移転を余儀なくされた。かつては物資の輸送は大日峠を往来し、人力によっておこなっていたが、ダムにより、林道が整備され、静岡市の中心部との車で結ばれた。また、現在、早川町雨畑と林道によってつながっている。（『田代・小河内の民俗』『井川雑穀文化調査報告書』『静岡県の地名』）

2. 日本ミツバチの飼育

人が巣を用意し、山野に生息する日本ミツバチが5月頃分蜂するところをねらって、群ごと捕獲し、巣に導いたり、蜂が好みそうなところに巣を置いて自然に巣が作られるのを待ち、飼育を行う。

3. Yさんの日本ミツバチの飼育（聞き書き）

《 巣箱 》

2011年（平成23）はYさんの飼育した日本ミツバチの群は24群であった。Yさんの巣は手作りのスギの四角い木箱である。後ろ板の幅30センチ、厚みは15ミリ板をつかう。それを後ろ板の両側に木を打ちつけるので巣の幅が33センチとなる。巣の木質について、ヒノキの巣にはハチが入ったことがないという。モミは重く1年で腐り、木割れが多い。ツガやカラマツの大きいのであれば巣にむく。手に入りやすいことから、最近ではスギの赤みのところを使っている。赤みは木の中央部で腐りにくい特徴がある。蜜を採った後の巣を一斗缶で煮て巣に塗り、においてハチが寄ってくるようにしている。ミツバチの巣はドラム缶か檻に入れて固定しておかないとクマにやられてしまう。ドラム缶に穴をあけて加工し、中に木の巣を入れている。



▲ 巣にぬる蜜蝋



▲ 巣を1斗缶で煮て固めたシート



《 日本ミツバチの分蜂 》

五月のお茶を摘む頃分蜂するので、お茶摘みどころではなく、巣を見張っていないといけない時もある。分蜂した蜂の群れは近くの木のまがった枝につくのでホースで水をかけて箱に入れる。手や容器ですくって箱に入れる。女王蜂は見た目では探せないが、群れの大半を箱に入れると女王蜂も大抵入っているので、残りの蜂も入る。高い木の場合はゆすって落とし、また固まって飛んでいくので追いかける。雨上がりの翌日は分蜂することが多いので、巣のそばで見張っている。分蜂はもともと居た蜂が出ていく。分蜂するとき、女王蜂は働き蜂をだいたいもの6割くらい連れていってしまう。一つの群れから何回も分蜂することがあり、何回も分蜂して残った蜂の群れは死んでしまう。巣の一番下に小指ほどの突起があり、そこに女王蜂がいるので、分蜂させないため、その小指の先のような巣を見つけて針で刺して女王蜂を殺す。その突起を見つけないのが難しいのと、殺したと思っても、また女王蜂が生まれていることがあり、そのような場合は分蜂してしまう。1匹か2匹は女王蜂を残しておく。そうすると分蜂しないので、働き蜂が多い群れとなって、蜜が多くとれる巣ができる。分蜂して空いてしまった巣に西洋ミツバチが入ったことが2回くらいある。日本ミツバチより巣が作れない。マチに巣箱を置くと西洋ミツバチが入るので、入ったら殺す。

《 日本ミツバチの性質、飼育方法 》

蜜を獲るのは年に1回、10月頃。蜜を獲ると冬越しするだけの餌がないから砂糖をやる。日本ミツバチはおとなしいが、蜜を獲るときは、どうしても何箇所かさされる。ちょっと痛いだけで大丈夫。もう免疫になってしまっている。日本ミツバチの幼虫は蜜を採りたいので食べない。黄色スズメバチはそんなにいないので、巣に特別な対策はとっていない。オオスズメバチに見出されてしまったら、巣の場所をかえる。場所をかえてもあんまり関係ない。立ち木の並んでいるところがよい。山肌が見えているところによく目立ってオオスズメバチに狙われる。

山の高いところでもザツボクがあれば何かしら花があるので150メートルくらいでも飼える。杉とヒノキでは花がないから飼えない。高いところにいるミツバチは木の花の蜜を吸っている。お茶の花の蜜も吸いに来る。蜜を採ったあとのミツバチには砂糖の餌をやる。中身は1斗の三分の一の水飴に三温糖を7kg入れ、1斗缶のふちから2センチくらい下がったところまで水を入れて煮たもの。沸騰したら火をとめて冷まし、行平鍋ですくって餌用の容器に移し替える。冬を越すのに一群あたりだいたい三升の餌がいる。今時分、蜜を獲ってから11月いっぱいまで三回から五回くらい餌をやる。1回分の餌はだいたい3日くらいで吸ってしまい、巣にあげてしまう。12月になると寒くなるので、活動しなくなるため餌はやらす、翌年の春まで餌はやらない。冬でも暖かい日に

は巣をあけて様子を見てやる。昔は秋に蜜を獲って餌をやらないことがあった。たいていは巣を出て行ってしまふ。しかし秋の花がよいと翌年まで生き延びている巣もあった。蜂の巣の向きは特にない。蟻で巣が出来ているのであまり暑いところだと巣が落ちてしまうので木の陰におく。

《 採蜜の日の山仕事 》

(開始朝7時。通常は6時半ころから作業をする。)

朝寒いと蜂が刺すので10時頃、陽があたってあたたかくなってからでないといと蜜はとらない。はじめにヒエを収穫する。穂だけを鎌で刈っていく。

収穫後はナメコとり作業。小指の先くらいの大きさ以上のものを収穫する。ヒエの畑から下がった沢にちかいところにホダギを並べてある。



▲ 早朝のヒエの穂つみ



▲ 山で栽培されているナメコ

《 蜜の収穫 》

巣箱を檻から取り出し、巣箱を逆さにする。巣は何等分かに切り分けとり、いくつかは蜂のために残しておく。蜜の入っていない巣も並べておくと、11月までの餌を蜜にして巣にたくわえる。餌を入れて巣箱を閉じる。



1 餌入れ



2 檻から取り出した巣箱を電動ドリルでねじをはずしてあける



3 巣箱をあけたところ



4 巣箱を逆さにしてへらではがしていく



5 蜜の入った巣と入ってない巣を木を渡した上に詰めて残す。餌を入れて表面を閉じる。



6 山の中に置いた巣。ドラム缶から出して表面をひらく。



7 巣を逆さにする。



8 巣を切り取る。



9 餌をおいて巣箱を閉じる。

